

吉岡実年譜〔改訂第2版〕

小林一郎編纂

## 吉岡実年譜

一九一九年（大正八年） 当歳  
四月十五日（実際は三月十五日か）、東京市本所区中ノ郷業平町に父紋太郎（四十四歳）と母いと（三十九歳）の三男として生まれる。姉政子、長兄長夫、次兄清（早世）。先祖は代代江戸の人であった。

一九二三年（大正十二年） 四歳

九月一日、関東大震災に遭遇、長兄に背負われて避難する。避難先で肺炎に罹り九死に一生を得る。

一九二四年（大正十三年） 五歳

肋膜炎に罹り四年生の一学期休学、駒形どぜう近くの診療所へ通院。中央公論社版《千一夜》を読む。友人宅や近くの図書館で《小學生全集》や大衆小説を乱読。末子として可愛がられ両親と浅草宮戸座の市川松燕や邦画を観る。オペラ館、〈笑いの王国〉へ通う。

一九三二年（昭和七年） 十三歳

三月、本所明德尋常小学校を卒業。四月、本所高等小学校に入学。震災後に移った東駒形の二軒長屋から本所区厩橋二の十三へ転居する。姉、兄は奉公に出ており階下に両親と三人で暮らす。二階に先住の佐藤樹光（春陵、のちに俳号として油桃）に、ゴリキーの《どん底》《母》などを教えられ、文学に親しむようになる。漠然と彫刻家、画家を夢見る。

一九三四年（昭和九年） 十五歳

三月、本所高等小学校を卒業、蜜柑箱一杯の

秋、麻疹に罹り外国からの救済物資の赤ゲツトをかぶって共働きの両親の帰りを待つ。

一九二六年（大正十五年／昭和元年） 七歳  
四月、本所明德尋常小学校に入学。二、三年生のころまで着物を着ている。

一九二八年（昭和三年） 九歳

初めて洋画（へつばさ）を浅草で観る。毎年夏休みに市川真間の叔母の家へ行きそこで江戸川乱歩の小説や《講談全集》を読む。

一九二九年（昭和四年） 十歳

ベイゴマを一つだけ残して処分。四月、本郷龍岡町の医書出版南山堂に奉公に出る。若い男ばかり三十人ほどの寄宿生活。夜間、向島商業学校に通うも中途退学。志賀直哉、山本有三、芥川龍之介、佐藤春夫を愛読。蕪村の俳句、石川啄木、前田夕暮、若山牧水、古泉千樫、木下利玄らの短歌も読み北原白秋の自選歌集《花樛》が決定的な詩的体験となる。《桐の花》を模倣した短歌を作りはじめ。

一九三五年（昭和十年） 十六歳

このころ日野草城主宰の《旗艦》で富澤赤黄男や片山桃史の新しい俳句を知る。洋画《アスファルト》のベティ・アーマンに魅了される。堀辰雄、ジイド、リルケ、チェホフ、オニールなどの作家を発見。また前川佐美雄、石原純の新短歌を真似て作歌を試みる。

一九三七年（昭和十二年） 十八歳

知人の版画家斎藤清宅で見たパブロ・ピカソの超現実派の詩（おそらく瀧口修造訳で《みづぶ》に掲載された〈詩を書くピカソ〉）に啓示を受ける。以後、北園克衛《円錐詩集》《白のアルバム》を愛読。このころ、一、三の友と俳句を作りはじめ。「石垣の苔のはがれし暑さかな」。

一九三八年（昭和十三年）

十九歳

初めての女子社員中村葉子が入社する。八月、仕事に疑問を持ち南山堂を退き厩橋の実家に帰る。九月、夢香洲書塾（佐藤樹光宅）へ仮寓し子供たちに習字を教えはじめ。佐藤から白秋《花檉》（改造文庫）を贈られてのちに最も古い蔵書となる。十一月、《蟹工船》再読。このころ佐藤と俳句や短歌を作る。

一九三九年（昭和十四年）

二十歳

本所区役所で仮徴兵検査。三月、姪誕生、兄

兵第四巻五吉岡実」。歌集を《蝶蠟鈔》、句集を《奴草》という題で残したいと思う。十月、明德尋常小学校同窓会、二百人くらい集まる。十一月、西村知章から小出版社を始めたと来信。西村書店を手伝うべきか悩む。句帖と《山家集》を手に西新井大師へ行き郊外の風物を染しむ。田尻写真館に春夢田尻彦二郎を訪ねる。雷門前の珈琲店ブラジルで白鷺会の第一回句会、油桃、龍灯城、千鶴、春夢、昌臣、行宇、四季男（吉岡）の七名が参加。本所高等小学校のクラス会。十二月、佐藤春陵の姪春のお伴で盛岡へ行き春陵の従弟佐藤徳松と再会。第二回白鷺句会。処女歌集を《歎歎》と決めるが実現せず。末日かぎりで夢香洲書塾を出る。この年、沈復《浮生六記》、三好達治詩集《春の岬》を読む。富田木歩の句を愛読。伊藤佐喜雄《花の宴》、津村信夫《戸隠の絵本》、前川佐美雄《くれなゐ》、斎藤史《魚歌》などの〈新ぐろりあ叢書〉を愛読。

に勧めて葉子と名づけられる。《旗艦》の神生彩史選《輪型陣》に皚皚吉の筆名で投じた「少女らは五月の胸を高くゆく」が入選、詩も含めて活字になった最初の作品と思われる。ペンネームの由来は不明だが吉岡實の漢字のアナグラムからか。皚皚吉名で《旗艦》に投稿した句が五月の《輪型陣》に続いて安住敦選《珊瑚礁》の七月、十月、十二月、翌年一月、二月に入選（これらは歿後〈吉岡実句集〉としてまとめられた）。洋画《バンドラの箱》のルイス・ブルックスに魅了される。六月、茅野蕭々訳《リルケ詩集》を購入。《左川ちか詩集》を愛読。新橋演舞場で新協劇団《テッド・エンド》を観る。八月、記念写真（のち《液体》《うまやはし日記》の口絵に使用）を撮り理髪店で坊主頭になる、一握りの髪を母に渡す。徴兵検査、第二乙種に合格。《東邦書策》に雅号白苔で書かれた作品「禪房花木深」掲載。兵役通知が届く「第二乙種

一九四〇年（昭和十五年）

二十一歳

一月、妙義山へ行く。第三回白鷺句会で最高点。父方の親類沢田家から板橋署の会計書記に就職を勧められる。二月、西村書店の仕事を手伝いはじめ。同社の入っていた内神田ビルで《馬酔木》の石田波郷を見かける。句会。三月、丸の内まで三好達治の詩歌懇話会賞授賞式を兼ねた講演会を聴く、講師は島崎藤村と萩原朔太郎、予定の北原白秋は急病で欠席。白秋とは生涯まみえず。築地小劇場《どん底》《火山灰地》を観る。この月かぎりで父が勤めを辞めることになる。五月、兵隊検査。召集令状が来る。入隊までの一週間、詩稿の整理。六月、友の手にノートの詩歌集《昏睡季節》を残して臨時召集のため目黒大橋の輜重隊に入隊。一種の教育で馬の取りあつかいを習い軍隊の密室的世界をかいま見る。七月、突然召集解除、迎えに来た父が夏帽を

買ってくれる。雑多な内容の詩歌集に嫌気が差すですでに進捗しておりやむなく続行。十月、最初の著書、習作的な詩歌集《昏睡季節》百部草蟬舎より刊行（《文藝汎論》一九四一年一月号に出版広告が載る）。一九五九年に歌集《魚藍》となった《蝶・嵐鈔》は五六百首のなから選んだ（歌稿は後年製本のうえ《赤鴉》と名づけられる）。この年、会津八一歌集《鹿鳴集》に惹かれる。殿岡辰雄の詩集を読み手紙を交換、《黒い帽子》を貰う。木下夕爾詩集《田舎の食卓》を読み、以後二年間の文通。《生れた家》を贈られる。

一九四一年（昭和十六年）

二十二歳

五月、《旗艦》終刊号の安住敦、片山桃史、水谷碎壺、富澤赤黄男共選《旗艦作品》に本名で投句した「少年と春の狐の懶惰なる」入选。同誌はその後《琥珀》となるが吉岡の俳句は見られない。六月、再び召集を受ける。

一月三日、父紋太郎死去。

一九四三年（昭和十八年）

二十四歳

冬、兄からの手紙で両親の死を知る。「父母の死を信ぜず雪の残りたる高梁畑の落日を見つ」。六七五部隊（新京駐屯中最大部隊）の軍旗祭で聯隊本部付輜重兵とシラノ・ド・ベルジュラックのパロディを演出上演。日本の週番士官を茶化した廉で師団長の逆鱗に触れ役者七人いち早く他部隊へ転属させられる。

一九四四年（昭和十九年）

二十五歳

懲罰を受け馬糞臭い蹄鉄を銜えたまま新京の街を歩かされる。二月、六七五部隊から一人見しらぬ部隊に転属。新兵のごとき扱いを受ける。齊齊<sup>チチ</sup>ハ<sup>ハ</sup>爾<sup>ハ</sup>、ハ<sup>ハ</sup>爾<sup>ハ</sup>濱<sup>ハ</sup>と転戦。

一九四五年（昭和二十年）

二十六歳

四月、満洲から朝鮮濟州島へ渡る。上陸以来

遺書として詩集《液体》を二日間でまとめ兄と小林梁、池田行之ら友人に託す。入營の二日前、出征を知った中村葉子がかりんとうを土産に来訪、互いの写真を交換して別れる。青山の東部第六部隊に応召。面会日に父老との訣れになる。七月、満洲（中国東北部）へ出征、日用品と岩波文庫の《万葉集》、リルケ《ロダン》、改造文庫の白秋《花檉》、白水社のゲーテ《親和力》を携える。新京（長春）付近の警備。以後、主に満洲で馬の世話

を軍務としながら一九四五年まで軍隊生活を送る。八月十三日、母いと死去。十二月八日、太平洋戦争勃発。十日、事実上の処女詩集《液体》百部草蟬舎より刊行（《文藝汎論》一九四二年三月号に出版広告が載る）。酷寒の満洲の兵舎で七十七番本を受けとる。

一九四二年（昭和十七年）

二十三歳

毎日輓馬で物資を搬び山奥へ移動。新星岳で野営し倒れた馬を食べて生きのびる。八月十五日、敗戦を迎える。退役時に陸軍伍長となる。従軍中に日記一冊と詩一冊のノートを書き短歌や俳句も若干作るが超現実主義的な作風の詩篇は引きあげ時に失われた。十一月、アメリカ軍に武装解除され復員。廃墟の東京に米五升、厄除けの一本箸《花檉》、写真帳を持ちかえり兄と生活。神田Y M C A前の香柏書房に最初の社員として入社する。

一九四六年（昭和二十一年）

二十七歳

一月、斎藤茂吉歌集《朝の螢》を読みの中に《赤光》《あらたま》に感銘。香柏書房の仕事で村岡花子や坪田譲治に原稿を依頼する。南山堂時代の先輩百瀬勝登と邂逅。五年ぶりの月給。二月、恩地孝四郎宅へ装丁の謝礼を持参、これを機にか装丁の研究に励むようになる。同僚で友人の日高真也が小説を書きはじめ

める。三月、文筆で暮らせるようになったのは四十歳過ぎだという坪田の話に自分もゆっくり作品を書いていきたいと考える。坪田譲治《異人屋敷》の装丁を中尾彰に依頼。日本美術展覧会で日本画の綺麗すぎるのに驚く。四月、真也の父日高牧師から聖書を贈られる。坪田譲治、村岡花子らが出席してキリスト教系の出版社香柏書房の創立祝い。八月、同社を退く。十月、日高真也の尽力で東洋堂に入社。幸田成友のカロン《日本大王国史》、柳田國男《分類農村語彙》などを手がける。十一月、萩原朔太郎詩集《月に吠える》《青猫》に初めて接し感銘を受ける。《凍港》や《黄旗》で山口誓子の句業をまとめて読む。

一九四七年（昭和二十二年） 二十八歳  
二月、明德尋常小学校のクラス会。七月、一行の詩も書けず《鹿鳴集》で心を鎮める。八月、《北原白秋詩集》通読。九月、戦後初め

イ福田、ジプシー・ローズ、一条さゆりらのストリップを観る。七月、《大手拓次詩集》を読む。十月、兄の家を出て池袋の姉の家に移る。十一月、極東軍事裁判の判決を電光二ユースで知る。十二月、椿作二郎の秋扇句会に出席、「冬の日の凝れば無為なる蛇の貌。」初めて《宮澤賢治詩集》を読む。

一九四九年（昭和二十四年） 三十歳  
一月、椿作二郎、田尻春夢、池田行宇らと瑞泉寺へ吟行、「黄梅やふるきいらかの波うてる」。四月、東洋堂の社長三井八智郎家に寄寓する。このころ詩を書こうと決め親しい俳句仲間とも訣別しようとする。五月、池田行之から中村葉子の消息を聞く。銀座松坂屋で梅原龍三郎、安井曾太郎の代表作展を観る。六月、詩が一篇できる。八月、「或る場所にある卵ほどさびしいものはない」、卵を主題にした詩を考える。《みづゑ》でクレー

て詩篇を発表（《新思潮》に二篇、東洋堂発行の《漁》に一篇）。《中原也詩集》を購読したがぴんと来なかった。谷内六郎の漫画を出版しようと思力、翌四八年、《マンガ笛吹き小次郎》と《大冒險マンガ魔の地中城》を東洋堂の関連会社から刊行。十月、帝劇でバレー《コッペリア》を観る。中井英夫編集の《新思潮》に掲載した詩の稿料を日高真也の友人下野博が持って来てくれる（生まれて初めての原稿料）。十一月、村松嘉津《プロヴンス隨筆》、西協順三郎詩集《あむばるのわりあ》《旅人かへらず》を読み西協には晩年に至るまで傾倒する。十二月、数寄屋橋で酔ったオーストラリア兵に殴られる。

一九四八年（昭和二十三年） 二十九歳  
一月、《牧野信一全集》耽読。二月、浅草ロック座のストリップショーで全裸に近いメリー松原に驚嘆する（その後、吾妻京子、キテの絵と評伝に触れる。九月、詩《ぼるる・くれーの歌》又は雪のキャンバス）脱稿（未発表）。リルケ《ロダン》から詩作という手仕事への啓示を受ける。《高橋新吉の詩集》を読む。

一九五〇年（昭和二十五年） 三十一歳  
詩集《静物》に至る習作的な詩を何篇か書く。草野心平《蛙》《富士山》の詩を読む。詩集《羅旬薔薇》で初めて吉田一穂の詩を知り《故園の書》の《石と魚——獵人日記》を好む。詩集《蛾》で初めて金子光晴の詩に触れ人生の浪費の輝きに目眩く。

一九五一年（昭和二十六年） 三十二歳  
《ガミアニ》《南北戦争》《蚤の浮かれ囃》《ジュリアンの青春》《トルーパー》《ロシヤ宮廷の踊子》《バルカン戦争》《元訳本と思われる秘密出版《指揮官夫人と其娘達》を戦前に読んでゐる）などの外国の「ボルノ小説」を読

む。四月、百瀬勝登の口添えて筑摩書房に入社、社長古田晁と顧問白井吉見、唐木順三、中村光夫らを知る。新企画の〈小学生全集〉を担当。図書目録や《一葉全集》の内容見本を作り和田芳恵を知る。麻布豊岡町の岩瀬家に下宿する。九月、田尻春夢、日記句稿類を焼却し亡き妻を追って入水自殺。

一九五二年（昭和二十七年）

三十三歳

筑摩書房で装丁を手がけはじめ。『飽きのこない本』『嫌みのない装丁』が身上。童画家太田大八・十四子夫妻を知り以後太田家が独身時代の憩いの場所となる。三月、難波田龍起から昆虫を描いた油彩を贈られる。《不良少年》の訳者丸谷才一と出会う。《秩序》の同人篠田一土とも知る。九月、田尻春夢句集《走馬燈》（松江川三郎編）が刊行される。

一九五三年（昭和二十八年）

三十四歳

同僚十数人による出版記念会、これからは人間を書くべきだという評を貰う、会田綱雄が吉岡の詩を朗読。麻布豊岡町の下宿を出て太田家に近い東京都練馬区南町一の三五四九の柳沢家の一室へ転居する。冬、永田耕衣句集《吹毛集》を偶然読み心惹かれる。

一九五六年（昭和三十一年）

三十七歳

二月、飯島耕一を知り《静物》を贈る。飯島に勧められ〈今日の会〉に入り大岡信、書肆ユリイカ社主伊達得夫らを知る。詩誌《ユリイカ》周辺の詩人、評論家たちと知り廃めるつもりだった詩を再び書きはじめる。古書店で求めた署名を裂いた《静物》を篠田一土に贈り以来一貫して支持を受ける。塚本邦雄歌集《裝飾染句》に惹かれる。飯島耕一詩集《他人の空》、高柳重信句集《黒彌撒》購読。

十二月、飯島が《講座現代詩》で〈過去〉を鑑賞（公の場での吉岡詩の最初の紹介）。〈素

《鹿鳴集》以来憧憬の奈良、京都へ初めて旅行する。新薬師寺金堂の十二神将立像とりわけ伐折羅大將像に心をうばわれる。

一九五四年（昭和二十九年）

三十五歳

秋、同居の画家吉田健男が軽井沢で年上の女性と心中、太田大八と健男の弟と遺骨を迎えに行く。健男の死を契機に現れたT・Iと一年の絶縁期間を挟んで四年近く交際。このころ、飯田龍太句集《百戸の谿》を読む。太田が挿絵（小学生全集）の《アラビアンナイト》か）を描くために取った海辺の定宿に同宿して《静物》の原稿整理、割付けをする。

一九五五年（昭和三十年）

三十六歳

八月、詩集《静物》を私家版（発行者太田大八）で二百部刊行。勤務先で六十部ほど売れる。清岡卓行、北村太郎、土橋治重らがいち早く認めて来信。会社近くの小料理屋北沢で

直な悪女）以来ブリジット・バルドーの全映画を観る。このころ三ヶ山孝子の遺句集《み霊祀り》を愛読。

一九五七年（昭和三十二年）

三十八歳

バー・エスカルゴで飯島耕一に〈僧侶〉の構想を語る。三月、筑摩書房の同僚十五人で会田綱雄詩集《鹹湖》出版記念会、会田の希望で各自好きな詩篇を朗読、吉岡は〈アンリの扉〉を読む。四月、飯島の強い推輓で〈僧侶〉が《ユリイカ》に掲載され詩壇の注目を浴びる。のちに詩集《僧侶》を形成する詩作に没頭。アヌイやテネシー・ウイリアムズ、オニール、エーメなどの戯曲を読む。

一九五八年（昭和三十三年）

三十九歳

早春、谷川温泉の宿で一夜にして〈苦力〉を書きあげる。四月、筑摩書房労組機関紙《わたしたちのしんぶん》に随想〈山羊の歌〉

署名本など。六月、脊髄炎の姉を見舞う。三年ぶりに兄を訪ね姉の病状を伝える。七月、《ユリイカ》に初の長詩《死児》が掲載され好評を博す。入沢康夫詩集《夏至の火》出版記念会に《今日の会》の一員として出席、他に大江健三郎や画家の落合茂らが集う。八月、《静物》革装本五部でき和田陽子、太田大八、飯島耕一に贈る。書きおろしの《感傷》脱稿し詩集《僧侶》の十九篇完成。二十九日、姉米本政子死去。十一月、詩集《僧侶》を書肆ユリイカから刊行。十二月、《今日》第十号で終刊。《今日》には中島可一郎、飯島耕一、難波律郎、大岡信、吉岡、岩田宏、辻井喬、山口洋子、長谷川龍生、吉野弘、平林敏彦、清岡卓行、金太中、児玉惇、鈴木創、多田智満子、岸田衿子、入沢康夫、田中清光、広田国臣らが集い、書肆ユリイカを発行所とした。

一九五九年（昭和三十四年）

四十歳

に詩篇とノオトを発表、当時の肩書は広告部次長。夏、宗左近と出あう。八月、妻が盲腸炎手術のため青山外科へ緊急入院。清岡卓行、飯島耕一、大岡信、岩田宏とともに同人詩誌《鰐》を創刊（書肆ユリイカ発行）、詩《下痢》を掲載。《今日の詩人双書》の一冊として《吉岡実詩集》（I）を書肆ユリイカから刊行、編集・解説篠田一士、初の自費でない本。九月、妻と菩提寺の巣鴨・真性寺へ父母の墓参、結婚の報告。本格的アンソロジー《現代詩全集》に詩篇を初めて多数再録。十月、飯島耕一宅で《鰐の会》。鰐同人や伊達得夫と栃木・太平山へ一泊旅行。十一月、《文學界》が高見順と篠田一士のエッセイを副えて作品（新作二篇と《僧侶》《喪服》《単純》の再録）の特集を組む。東京都北区滝野川七の三公団滝野川アパート四〇四号室へ転居。

一九六〇年（昭和三十五年）

四十一歳

一月、浅草のお好み焼屋染太郎で《僧侶》出版記念会。飯島耕一、大岡信、岩田宏、清岡卓行、伊達得夫、岸田衿子、広田国臣、大森忠行、勝本富士雄、安西均、那珂太郎、中島可一郎、篠田一士らが出席、流しの艶歌の伴奏つきの宴となる。二月、筑摩書房広告部の社員四人で犬吠崎へ和田陽子の送別旅行。詩集《水つた焰》ができた清岡卓行宅を伊達得夫と訪問。三月、《僧侶》がH氏賞に推されるが辞退。しかし友人らの奨めもあって四月、第九回H氏賞を受ける（いわゆる「H氏賞事件」が起こり草野心平の推輓を知る）。田村隆一と出あう。五月九日、和田陽子と結婚、記念に歌集《魚藍》を私家版で刊行、披露宴の出席者に配る。東北へ四泊五日の新婚旅行。新居は東京都渋谷区竹下町二十七アパート向陽七号室。草月会館でH氏賞授賞式、席上これからは妻の手作りの料理で少しは肥りたいと挨拶。六月、《現代詩手帖》創刊号

浜口陽三の銅版画《白菜》を求める。二月、永田力のアトリエでデッサン練習（長続きせず）。三月、真鍋博の新居を栃折久美子と訪問。向島百花園で宗左近の詩集と評論の出版記念会。辻井喬の口添えてシヤム猫を飼う。四月、《鰐の会》で小B6判三十二ページの《鰐叢書》全二十冊の刊行を決定、第二冊に吉岡実詩集《ライラック・ガーデン》を企画するが刊行されなかった。高島屋で妻と《中国名陶百選》を観る。五月、丸谷才一と《エホバの顔を避けて》の出版を喜ぶ。一年遅れの結婚届を出す。NHKラジオの放送詩集《波よ永遠に止れ》（《ユリイカ》六月号掲載稿から八十行を削除して五月十一日に放送）の本番録音に立ちあう、演出遠藤利男、出演若山弦蔵。永田耕衣還暦句集《與奪鈔》が届き句集注文を機に耕衣から来信、以後生涯に亘り文通と親交が続く。六月、会社で安保反対デモのプラカード作り。京都へ旅

行。龍安寺、大仙院、広隆寺、苔寺、天龍寺、嵐山、桂離宮（やつと許可を取り見しらぬ四五十人と拝観）などを巡る。七月、鰐同人および平林敏彦、伊達得夫らと日光へ一泊旅行。八月、《ユリイカ》に随想〈風俗〉発表。秋、安東次男と駒井哲郎の詩画集《からんどりえ》購入。大岡信の詩〈死に関する詩的デッサンの試み〉に感動し大岡に葉書を出す。

一九六一年（昭和三十六年）

四十二歳

このころ大岡信の紹介で高柳重信と出会う。一月、《ユリイカ》に詩〈衣鉢〉発表。三鷹の大岡宅に初めて妻を伴って出かける、飯島耕一夫妻も来る。十六日、伊達得夫肝硬変で急逝、四十歳、茫然たり。追悼のための伊達の遺文集《ユリイカ抄》の装丁を担当。二月、《圖書新聞》で祐乗坊宣明、小宮山量平と鼎談〈読者と本の結びつき〉出版広告はどうあるべきか、当時の肩書は筑摩書房宣伝課

長。《ユリイカ》終刊。《現代詩手帖》のアンケート〈六一年度に期待する新人〉に岩成達也と山本道子を挙げる。七月、《ユリイカ抄》で初めて伊達の《吉岡実異聞》を読み観察が鋭いのに驚く。このころ詩に倦怠を覚える。十二月、島尾敏雄を囲む会で清岡卓行、吉本隆明と時代小説の評定をして楽しむ。

一九六二年（昭和三十七年）

四十三歳

一月、《現代詩》に詩的散文〈突堤にて〉を発表。三月七日、富澤赤黄男死去、五十九歳。八月、俳句評論賞の選考委員となり築地の灘万で岡井隆、金子兜太と初めて会う。金子、神田秀夫、楠本憲吉、高柳重信との第二回俳句評論賞選考座談会で渡部杜茂子、安井浩司を推奨。前衛俳句に関心を持つ。九月、詩集《紡錘形》を草蠅舎から刊行。《土地よ、痛みを負え》で岡井隆の短歌を知る。楠本から永田耕衣の短冊を贈られる。《鰐》第十号で終

刊（鰐の会発行）、以降同人詩誌には加わらず。山口誓子と初めて会い《紡錘形》を贈る。

一九六三年（昭和三十八年）

四十四歳

一月、《現代詩》で天沢退二郎と〈新春対談〉。三月、《西脇順三郎全詩集》を筑摩書房から刊行した縁で西脇の知遇を得る。同書で《Ambarata》を読みその真の衝撃と美的価値を知る。六月、永田耕衣から書作品を贈られる。七月、《詩学》で安藤一郎、中桐雅夫、吉野弘、小海永二、秋谷豊、安西均、村野四郎、草野心平と座談会〈第13回日本現代詩人会日氏賞選考委員座談会〉。

一九六四年（昭和三十九年）

四十五歳

このころ筑摩書房刊《草野心平詩全景》出版決定の内祝いで草野心平と会う。三月、銀座・青木画廊でゾンネンシュターンの個展を観る。晩春、妻が吐血して滝野川の久保田病

院に入院。四週間後に退院し自宅療養で回復。妻とともに自身二度めの奈良旅行。秋篠寺、法隆寺、浄瑠璃寺（吉祥天女像の豊麗な容姿をかいま見る）を巡る。

一九六五年（昭和四十年）

四十六歳

四月、妻から誕生日祝いに北園克衛詩集《固い卵》を贈られる。夏、二泊三日の京都旅行。繩手四条の清水房に泊り、銀閣、詩仙堂、修学院、大覚寺、祇王寺、嵐山、南禅寺（瓢亭の朝粥）、比叡山、光悦寺などを巡る。《定本・富澤赤黄男句集》発起人（高柳重信ら他全三十名）の一人となる。十一月、《無限》に詩〈やさしい放火魔〉を発表。十二月、銀座のブラジルで紫のマントの白石かずこと会い新詩集《今晩は荒模様》を貰う（初対面）。

一九六六年（昭和四十一年）

四十七歳

一月、句集《球體感覺》《えくとぶらすま》

で読んでいた加藤郁乎と出あう。四月、三橋敏雄処女句集《まぼろしの鱈》に渴を癒される。七月、入沢康夫詩集《季節についての試論》出版記念会で高橋睦郎と出あう。九月、妻と京都旅行。南禅寺、慈照寺銀閣、詩仙堂、三千院、寂光院、金閣寺、嵐山、苔寺、天龍寺などを巡る。十月、《詩と批評》の〈アンケート〉「このごろ好きな詩人」に白石かずこと高橋睦郎を挙げる。十一月、会田綱雄の詩と書の個展で初対面の高橋新吉から《三田文学》に発表した詩〈孤独なオートバイ〉を褒められ勇気づけられる。ポリーヌ・レアージュ《O嬢の物語》（濫澤龍彦訳）を読む。若松孝二の〈胎児が密猟する時〉を観る。

一九六七年（昭和四十二年） 四十八歳  
この年度のH氏賞選考委員となる。二月、灘万での加藤郁乎《形而情学》室生犀星詩人賞受賞を祝う会で池田満寿夫と出あい飯島

を、数多く詩で描くようになった」最初の詩篇。〈河井寛次郎遺作展〉、ブニユエル〈小間使の日記〉〈ヒリディアナ〉などを観る。三鬼句集《夜の桃》、阿部青鞋句集を読む。七月、紀伊國屋ホールで高井富子舞踏公演〈形而情学〉（土方巽、笠井叡、大野一雄ら出演）を観る。「奇怪にして典雅、ワイセツにして高貴、コッケイにして厳肅なる暗黒の祝祭」。金井美恵子と初めて会う。八月、石井満隆のリサイタル〈舞踏ジュネ〉（土方巽出演）を観る。夏、世田谷代沢の喫茶店邪宗門で森茉莉と会い自伝《記憶の絵》出版の相談（造本装丁も手がける）。九月、《俳句評論》の第三回俳句評論賞の俳句部門の審査員（他に高屋窓秋、高柳重信、塚本邦雄、永田耕衣、三橋鷹女）となる。初秋、妻と三泊四日の関西旅行。京都、奈良。春日神社、興福寺で阿修羅像を観る。秋、北鎌倉の濫澤龍彦宅を初めて訪問、夕刻に松山俊太郎が訪れ酒と流行歌、

耕一から土方巽を紹介される。深夜の新宿ビット・インで唐十郎率いる劇団状況劇場の〈時夜無銀髪風人（ジョン・シルバー）〉に感動。春、太宰治賞応募小説から金井美恵子を発見。四月、《神生彩史定本句集》を読む。草月ホールでビートルズの〈カール〉をソロで踊る土方巽の暗黒舞踏劇、アルト・館公演〈ゲスラー・テル群論〉に慄然とし以来土方のほとんどすべての舞台を観る。会田佐和子のオブジェ展で作品を求める、南画廊の〈半島状の！〉展で作者の加納光於に紹介される。全出版人大会で永年勤続者として表彰される。高島屋で〈北斎展〉。京都へ旅行。銀閣、永観堂法然院を巡る。神戸須磨の田荷軒を訪れ初めて永田耕衣と対面、書画を観て〈白桃図〉（毎年夏になると居間に懸けた）を予約、記念に〈鴛鴦図〉を貰う。五月、土方巽の求めに応えた〈青い柱はどこにあるか？〉を脱稿、「親しい芸術家たちの肖像

軍歌で夜が明ける。十月、小田久郎の要望で全詩集として《吉岡実詩集》（2）を思潮社から刊行、ブックデザイン杉浦康平。八木忠栄編集の《現代詩手帖》が吉岡実特集を組む、新作の詩を発表、入沢康夫との対談〈模糊とした世界へ〉で《万葉集》や《古今集》などの古典と現代との混合した世界を作りたいと発言。笠井叡独舞公演〈舞踏への招宴〉を観る。十一月、《詩の本》に詩論〈わたしの作詩法？〉を発表。《瀧口修造の詩的実験 1935》内容見本に推薦文。《俳句評論》創刊十周年記念大会に参加、三橋敏雄と出あう。十二月、新宿ステーションビルで岡井隆歌集《眼底紀行》を語る会、初対面の塚本邦雄と擦れちがう。原宿・檻の中で西脇順三郎らと瀧口修造の六十四歳の誕生日と《詩の実験》刊行を祝う会、大岡信、飯島耕一と西脇郎に初めて誘われる。アイオワ州立大学の客員芸術家として渡米する田村隆一の送別会に出席。

一九六八年（昭和四十三年） 四十九歳  
 一月、澁澤龍彦宅を加藤郁乎と訪問、澁澤に拳玉を贈る。拳玉は子供のころから「達人」を自称する腕前だった。三月、《俳句評論》に談話〈審査の感想（俳句）〉。笠井叡の結婚披露宴。細江英公写真展へともなく悲劇的な喜劇——日本の舞踏家・天才〈土方巽〉主演写真劇場（のち《鎌鼬》として出版）を観る、初対面の細江らと祝宴、種村季弘と初めて会う。春、西脇順三郎が毎週一回来社し、鍵谷幸信、筑摩書房の同僚会田綱雄、江森國友らと神田神保町界隈で酒席を共にする。荻窪シミズ画廊の〈金子光晴展〉で窪田般彌と会い高橋康也と初めて会う。六月、阿佐ヶ谷の唐十郎宅で唐の処女出版《腰巻お仙》記念パーティ。花園神社で状況劇場へ由比正雪を観る。七月、詩集《静かな家》を思潮社から刊行。中西夏之作の卵のオブジェ（の

い柱はどこにあるか？）を再録、この限定五十部で大型箱入りの豪華な詩画集制作のために目黒のアズベスト館を訪ねる。年末、滝野川の公園住宅から東京都目黒区青葉台松見坂のマンションに転居。シャム猫のデッサン（杜）逃しエリ（牝）もまもなく死す。《不思議の国のアリス》やハンス・ベルメール《人形写真集》に魅せられる。富岡多恵子や白石かずこの詩を愛読。代々木上原の高柳重信宅を初めて訪問。曾根中生〈性盗ねずみ小僧〉〈色情姉妹〉、神代辰巳〈一条さゆり・濡れた欲情〉、田中登〈人妻集団暴行致死事件〉などの日活ロマンポルノ映画を観る。

一九六九年（昭和四十四年） 五十歳  
 一月、土方巽が笠井叡とともに初めて来宅。  
 三月、《映画芸術》に談〈純粋と混沌——大和屋〉と新しい作家たち。筑摩書房は《西脇順三郎全集》の刊行を決定し、銀座・大隈

ち《土方巽頌》のビジュアルに使用）を土方巽から貰う。資生堂パーラーで高橋睦郎からインタヴューを受ける。八月、ゴダール〈男性・女性〉、芦川羊子の第一回リサイタル（つねに遠のいてゆく風景）（土方巽演出）。笠井叡の舞踏〈稚児の草子〉を観る。九月、〈現代詩文庫〉の一冊として《吉岡実詩集》（3）を思潮社から刊行、詩人論として高橋睦郎〈吉岡実氏に76の質問〉。高井富子舞踏公演〈まんだら屋敷〉（土方巽の演出と独舞）。秋、東京国立近代美術館で〈ヘンリー・ムーア展〉。十月、《季刊藝術》に詩〈神秘的な時代の詩〉を発表、土方巽舞踏公演〈土方巽と日本人——肉体の叛乱〉を観る、土方夫人元藤嬋子と初めて会う。十一月、文藝春秋画廊での〈西脇順三郎画展〉で土方を大岡信と引きあわせる。中嶋夏の舞踏〈麗子〉を観る。土方巽の〈肉体の叛乱〉と舞踏生活十周年を記念する詩画集《土方巽舞踏展あんま》に〈青

で西脇順三郎、竹之内静雄、井上達三、会田綱雄、新倉俊一、鍵谷幸信と編集打合せの会。二十九日、昭森社社主森谷均死去、七十一歳。四月、青山斎場での友人葬に参列。五月、筑摩書房はPR誌《ちくま》を創刊、初代編集長土井一正、吉岡は二代め。加藤郁乎、高柳重信、初対面の海上雅臣、岡田宗叡と永田耕衣展の世話人となる。七月、日本橋三越の〈書と絵による永田耕衣展〉で〈白桃女神像〉を予約、耕衣の初期句集《眞風》を飯島耕一に贈る。北浦和の海上宅を耕衣と訪問し白隠や徳富蘇峰遺愛の黄山谷を観る。八月、長野千秋撮影、大野一雄出演の舞踏映画〈O氏の肖像〉、記念冊子に文を寄せる。九月、赤坂のスペースカプセルで芦川羊子らの舞踏を観る、吉岡の詩をひそかに読んでいるという三島由紀夫と初めて挨拶を交わす。十一月、《琴座》に〈日記抄——耕衣展に関する七章〉発表。渋谷の東映で土方巽主演の映画〈恐怖

奇形人間。大野慶人舞踏リサイタルを観る。十二月、永田耕衣から画〈鯁佛〉を贈られる。白石かずこの小学生の娘に白土三平《カムイ伝》全巻を贈る。田村隆一編集の季刊詩誌《都市》掲載の〈コレラ〉を最後にほぼ二年間に亘りほとんど詩篇を発表しなくなる。

一九七〇年（昭和四十五年）

五十一歳

骨董店で李朝木工の奠雁を購い以来その収集に励む。片山健画集《美しい日々》に衝撃を受ける。新春、肩に激痛、九段坂病院へ通院。二月、《太陽》で四谷シモンの人形を知る。《吉岡実詩集（普及版）》刊行。三月、西脇順三郎らと西脇全集打合せの会。新作《黄金詩篇》を持参した吉増剛造に《紡錘形》を贈る。《坂本繁二郎追悼展〈富本憲吉遺作展〉》を観る。六月、筑摩書房創立三十年となる。七月、西脇順三郎の詩〈ヨシキリ〉にその名がとどめられる。八月、コレクシヨン展示即売へ土

方異燐燦大踏鑑》で篠山紀信と初めて会う。九月、ノアノアで金井美恵子の夕べ、初対面のつげ義春らと祝杯。十月、瑛峨三智子の芝居と土方巽、芦川羊子らの踊りによる〈骨鯁身峠死人葛〉を妻と観る。十一月、三島由紀夫剖腹自殺、四十五歳、大きな衝撃を受ける。このころキエリクロボタンの一番を飼う。つげ義春の漫画や林静一の抒情画に注目する。

一九七一年（昭和四十六年）

五十二歳

一月、《ちくま》編集主任となり一九七八年七月の百十一号まで担当する。新宿アト・ヴィレッジで幼獣社公演〈売ラブ〉（芦川羊子、小林嵯峨ら出演、土方巽演出）を観る。三月、《西脇順三郎全集（第一巻）》が完成し、神田・亀半で祝賀会。四月、詩作再開を三浦雅士から要請される。西脇順三郎、村野四郎、田中冬二らと百草園に遊ぶ。このころ《校本宮澤賢治全集》の校訂・編集で入沢康夫、天

沢退次郎連日來社。五月、西脇順三郎らと鎌倉に遊び高見順未亡人と懇談。初夏、東駒形の小料理店で明徳尋常小学校のクラス会、十四名も集まる。六月、長野千秋撮影、大野一雄舞踏〈〇氏の曼陀羅——遊行夢華〉。小田急百貨店の〈近世異端の芸術展〉で曾我蕭白、長沢蘆雪を観る。七月、唐十郎の山中湖の稽古場「乞食城」落成記念パーティー。九月、《叢書溶ける魚》第二冊として詩集《液体》を再刊。東京国立博物館で《伊藤若冲展》。十月、笠井叡と天使館公演〈丘の麓〉を観る、巖谷國土と初めて会う。

一九七二年（昭和四十七年）

五十三歳

一月、笠井叡舞踏会〈タンホイザー〉を観る。京橋・柳屋画廊の〈高橋新吉画展〉に色紙を賛助出品。早春、高橋康也宅を訪問。四月、《ユリイカ》の三浦雅士の勧めで詩〈葉〉を「連祷詩《粘土説》の一部」として発表（《粘

土説》は実現せず）。妻と高遠の桜を見に四年ぶりの旅行。十六日、川端康成ガス自殺、七十二歳。五月、銀座・万葉洞で永田耕衣展を観る。六月、《別冊現代詩手帖》に〈ヘルイス・キャロルを探す方法〉（わがアリスへの接近、少女伝説）をキャロル撮影の写真のモンタージュとともに発表、それまでの禁を破り固有名詞を多く使用する。池袋の西武百貨店フアウンテンホールで燐燦大踏鑑公演〈すさめ玉〉（土方巽演出）を観る。九月、この年の三月に開店した「ぼるこ・ぼるうる」主催の〈ぼるこ・ぼえとりの展〉に出品。玉野黄市の舞踏〈長須鯨〉を観る。秋、京都国立博物館で〈平家納経〉全巻を観る、千載一遇。十月、《鷹》で佐佐木幸綱、金子兜太、高柳重信、藤田湘子と座談会〈現代俳句Ⅱその断面〉。翌月にかけてアトシアター新宿文化で燐燦大踏鑑、第二次暗黒舞踏派結末記念公演、土方巽作品集《四季のための二十七晩》

の諸作品（第一夜〈痲瘡譚〉を除く）を観る。

一九七三年（昭和四十八年） 五十四歳

大岡信、入沢康夫、中江俊夫とこの年の〈ユリイカ書評欄〉の相談役になる。二月、《美術手帖》土方巽特集号に発表した〈聖あんま語彙篇〉で意識的に材料を使う「引用」を確立、詩法の転換をなす。原宿・福祿寿で《西脇順三郎全集》完結祝賀会。ダルマインコを飼いはじめる。鎌倉の田村隆一の新居を会田綱雄と訪問、三人で裏山を越え極楽寺の境内を歩く。八月、歌集《魚藍（新装版）》刊行。九月、三浦雅士編集の《ユリイカ》が百三十五ページに亘る吉岡実特集を組む、新作詩や写真、大岡信との対話〈卵形の世界から〉を発表し《神秘的な時代の詩・抄》として〈スワンベルグの歌〉など九篇を再録、瀧口修造や北園克衛らが寄稿した。幡轆大踏鑑公演、踊り子フービーと西武劇場のための

十五日間〈静かな家〉を観る、「あらゆる芸術家にはかつての自己の作品を、引用し、変形し、増殖してゆくという、営為がある」。

画廊人魚館の片山健個展で鉛筆画（無題）を先約の高橋睦郎から入手（のち《サフラン摘み》のジャケットに使用）、片山と初めて会う。秋、真性寺で父母の三十三回忌。十月、磨赤児主宰大駱駝艦の〈陽物神譚〉（土方巽最後の舞踏となった）。青木画廊で四谷シモン人形展〈未来と過去のイヴ〉を観る。三十日、古田晃心筋梗塞で急逝、六十七歳。十一月、鎌倉の神奈川県立近代美術館で〈デ・キリコ展〉、横浜高島屋で渴望久しい三井寺（園城寺）の〈黄不動〉。荻窪・光明院で中嶋夏の〈ひねもす神楽坂抄〉を観る。

一九七四年（昭和四十九年） 五十五歳

馬を主題にした詩篇を集めた小冊子《馬・春の絵》の企画があつたが実現せず。新春、高アスベスト館でシアターアスベスト館落成記念の白桃房舞踏公演〈サイレン・鮭〉を観る。

一九七五年（昭和五十年） 五十六歳

この年、アスベスト館で白桃房舞踏公演、幡轆大踏鑑作品を数多く観る。二月、《短歌》で加藤郁乎、那珂太郎、飯島耕一、吉増剛造と座談会〈悪しき時を生きる現代の詩——座談形式による特集〈今日の歌・現代の詩〉〉。飯島耕一の高見順賞授賞式に出席、友人代表として挨拶。△元代道釈人物画特別展観△で伝顔輝筆〈寒山拾得図〉真蹟〈蝦蟇鉄拐図〉に感銘する。三月、笠井叡舞踏団素戔鳴結成公演〈黄泉比良坂〉を観る。山の上ホテルで中村苑子句集《水妖詞館》出版記念会、高柳重信の娘路子と会う。東京国立近代美術館で〈ポール・デルボー展〉を観る。五月、《現代詩手帖》で飯島耕一、岡田隆彦、佐々木幹郎と座談会〈思想なき時代の詩人〉。六月、詩

島屋で〈鉄斎展〉。一月、神戸・舞子ヴィラでの永田耕衣句集《非佛》出版記念会（赤尾兜子發起）で渡辺一考と初めて会う。二月、浜田山の状況劇場の稽古場開きに行き唐十郎夫妻から若松孝二を紹介される。四月、浅草伝法院で西脇順三郎画〈籠の図〉〈虎の図〉の披露。詩《異霊祭》を書肆山田から刊行。五月、妻と牛島の藤を見に行く。六月、《現代詩手帖》にアンケート〈詩人の食べる店〉。七月、詩《異霊祭（特装版）》刊行。秋、西落合に瀧口修造を訪ね筑摩書房版瀧口修造全集出版の承認を打診するも得られず、かわりに《手づくり諺集》をまとめるよう依頼する。十月十二日、午後九時からNHKラジオで〈吉岡実の世界〉が放送される、加藤郁乎、天沢退二郎、大岡信が吉岡の詩を朗読、金井美恵子の談話、土方巽による「教育勅語的発声」の〈僧侶〉朗読。詩集《神秘的な時代の詩》を湯川成一の湯川書房から刊行。十一月、

集《神秘的な時代の詩〔特装版〕》刊行。銀座・第二浜作で《西脇順三郎詩と詩論》刊行の会。《歳華集》出版を祝い、兜子を励ます会（神戸・生田神社会館）に出席、祝辞を述べる。コーベブックスに渡辺一考を訪ね、永田耕衣宅に赴く。通雅彦《円環と卵形——吉岡実ノート》刊。七月、詩《悪趣味な夏の旅》を《新劇》に発表。九月、渡辺一考が耕衣書《不生》の額を持参、アバティの色彩銅版画と掛けかえる。詩《示影針（グノーマン）》を《ユリイカ》に発表。このころ詩の生成における想像力の枯渇を予感。矢島文夫《ヴァイオナスの神話》を読む。十月、土方巽、ビショップ山田に誘われ山形県鶴岡市へ北方舞踏派結成記念公演《塩首》（磨赤児と大駱駝艦、白桃房の芦川羊子、玉野黄市と哈爾賓派、作・主演のビショップ山田と北方舞踏派ほか出演）を観に行く。松山俊太郎と羽黒山を参詣。初冬、銅羅魔館で初めて早稲田

小劇場の《夜と時計》を妻と観る、鈴木忠志夫妻と会う。十二月、《ユリイカ》臨時増刊号で飯島耕一と対話《詩的青春の光芒》。

一九七六年（昭和五十一年） 五十七歳  
一月、笠井劔独舞踏公演《月読蛭子》。三月、同じく《トリストアンとイゾルデ》を観る。春初の英訳詩抄《Ilic Garden》（佐藤紘彰訳）をChicago Review Pressから刊行。飯田善國の画室で西脇順三郎らと酒宴、エーゲ海岸の小石を貰う。六月、アスベスト館で《ひとがた》を観る。十年来の懸案、選句集《耕衣百句》をコーベブックスから刊行。八月、山田耕一の要望で詩集《神秘的な時代の詩〔普及版〕》刊行。九月、大内田圭弥監督、土方巽主演の映画《風の風景》の試写。笠井劔独舞踏公演《個人的秘儀としての舞踏のために（1）》を観る。清水康雄の要望で詩集《サフラン摘み》を青土社から刊行。たちまち版を重

ねる。十月、高柳重信と共編で中村苑子句集《花狩》をコーベブックスから刊行。十一月、《ユリイカ》臨時増刊号の《一九七六年十一月五日から一九七六年十一月十日にかけて日本在住の十六人の詩人がユリイカ編集部に寄せたオブジェ一覧》に初号活字の「恵」を発表。《サフラン摘み》に対する第四回無限賞（選考委員は西脇順三郎、草野心平、中桐雅夫、田村隆一、山本太郎）を辞退。種村季弘の《壺中天奇聞》私家版の出版を祝う会（麻布十番・永坂更科）に現存作家の一人として招かれる、他は稲垣足穂、吉行淳之介（このとき初対面）、濫澤龍彦。十二月号《現代詩手帖》のアンケート《今年度の収穫》で、佐佐木幸綱、岡田隆彦、荒川洋治、渋沢孝輔、高橋睦郎、粟津則雄、川村二郎、鷲巢繁男、佐々木幹郎、井上輝夫、菅野昭正が、同じく《文藝》の《一九七六年の成果》で、篠田一士、飯島耕一、渋沢孝輔、北村太郎、川村二

郎、菅野昭正、濫澤龍彦、天沢退二郎、岡田隆彦が吉岡の詩集《サフラン摘み》を挙げる。十二月、《富澤赤黄男全句集》に某文。アスベスト館封印記念公演《鯨線上の奥方》を観る。《サフラン摘み》で第七回高見順賞を受賞（選考委員中村真一郎、田村隆一、山本太郎、大岡信、入沢康夫の全員一致による授賞）。笠井劔独舞踏公演《物質の未来》を観る。

一九七七年（昭和五十二年） 五十八歳  
一月、赤坂プリンスホテルで高見順賞贈呈式、入沢康夫が選考経過を報告、百人を超える来客、新宿・栃木屋で二次会。二月、《週刊読書人》に小笠原賢二《厳肅なる暗黒の祝祭》の世界——高見順賞受賞の吉岡実氏に聞く《掲載。高橋康也の《S・ベケット》で「想像力は死んだ 想像せよ」の一言に触れる。四月、天児牛大舞踏処女サイタル《アマガツ頌》を観る。岳父和田芳恵の日本文学大賞授

賞式に招かれる。見物人に恐れをなして恒例の五月の浅草・三社祭、七月のほおずき市に行くのをやめる。六月、妻と妻の友人と水元公園の菖蒲を観る。明治神宮御苑の菖蒲もしばしば見に行く。梅のころには日野・百草園、桜のころには九段・千鳥ヶ淵、まれには鎌倉・瑞泉寺に水仙を見に行くこともあった。逍空賞受賞パーティで《ひたくれなぬ》の齋藤史と初めて会う。八月、池田満寿夫の芥川賞受賞パーティに出席。俳句仲間と田尻春夢の墓参。天候不順で雨が降りつづく。和田芳恵発病、大田区长原の和田家を見舞う。九月、共編の《現代俳句全集》を立風書房から刊行開始。十月、筑摩書房の同僚と澁澤龍彦宅を訪問。五日早暁、和田芳恵死去、七十一歳。通夜、密葬、築地本願寺で葬儀。形見に一葉の短冊と魯山人の灰皿を貰う。二十一日、宮川淳死去、四十四歳。十一月、第一生命ホールで大野一雄舞踏公演《ラ・アルヘン

チーナ頌》(土方巽演出)を観る。古河の宗願寺へ和田芳恵の納骨。十二月刊の《齋藤史全集集》の内容見本に推薦文。十二月、《無限》に詩篇《タコ》を再録し《自註》を付す。十四日、久我山病院で妻の兄昭急逝する。渋谷・駒形とぞうで西脇順三郎、会田綱雄、新倉俊一と忘年会。ポール・デイヴィスのアクリル画《猫とリンゴ》を購入。

一九七八年(昭和五十三年) 五十九歳  
《ちくま》連載《碧巖の禅僧達》を機に毎月のように高橋新吉宅を訪問。一月、《現代俳句全集(第五卷)》に《枇杷男の美学》を発表。粒来哲蔵の高見順賞受賞パーティに出席。三月、《Japanese Literature Today》第三号に福田陸太郎訳による英訳《サフラン摘み》を掲載。《現代詩手帖》に談話《吉岡実氏にテレビをめぐる15の質問》。春、《草野心平全集》推薦文の依頼で西脇順三郎を訪問。五月、

詩《雷雨の姿を見よ》を《海》へ発表。六月、山海塾を結成した天兒牛大の舞踏《金柑少年》を観る。六月、北園克衛死去、七十五歳。生前面識はなかったが告別式に参列。《新選現代詩文庫》の一冊として《新選吉岡実詩集》(4)を思潮社から刊行。七月、松山俊太郎夫妻、土方巽夫妻と大佛次郎記念館へ向かう。大野慶人夫妻の尽力で澁澤龍彦夫妻、種村季弘夫妻、唐十郎・李礼仙夫妻、四谷シモンらと旧懐の一夕。十二日、筑摩書房は東京地裁へ会社更生法適用を申請し事実上倒産。当時としては出版界最大の負債総額三十五億円、新聞を読むまで知らずにいる。友人知己から見舞の電話を受け残務整理に没頭。西脇順三郎を訪ね会社の状況報告となる。その後、地裁は筑摩に適用を認め更生手続開始を決定、再建への道を進む。九月、荻窪シミズ画廊で片山健の個展。十一月、《エピステマー》宮川淳追悼号へ詩《織物の三つの端布》を登

表。南天子画廊での瀧口修造とジヨアン・ミロの詩画集《ミロの星と共に》展示会に行きこれが瀧口との別れになる。三十日、在社二十七年半の筑摩書房を参与で退職する。ホテルグランドパレスでの唐十郎《海星・河童》の泉鏡花賞受賞を祝う会で挨拶。竹西寛子から冬至梅の鉢を貰う。十二月、第九回高見順賞の選考から田村隆一に替わって選考委員に加わり鮎川信夫《宿恋行》、安西均《金閣》、受賞の長谷川龍生《詩的生活》を推す。大岡信《春 少女に》(発行日の関係で対象外)と三好豊一郎《林中感懐》にも言及。

一九七九年(昭和五十四年) 六十歳  
一月、《種村季弘のラビントス》の内容見本に推薦文。西脇順三郎邸に年賀、新詩集出版のため筑摩書房との交渉を約する。詩集《人類》の造本装丁を担当し西脇とたびたび会う。五反田公共職業安定所の失業保険の説

明会に出る。国立小劇場の文楽へひらかな盛衰記》お筆笹引の段に感動。赤坂プリンスホテルで第九回高見順賞の贈呈式、長谷川龍生《詩的生活》の選考報告を行う。四月、還暦を迎え飯島耕一宅で大岡信・かね子夫妻、岡田隆彦・史乃夫妻、飯島耕一・奈美子夫妻と祝いの小宴、戯れ書きを交換する。晩春、東京国立近代美術館で《岸田劉生展》を観る。五月、詩《金柑譚》を《海》へ発表。六月、地下鉄千代田線明治神宮前駅のホーム壁面に詩《野》を出品（のち詩のアンソロジー《地下鉄のオルフェ》オーデスク刊）。堀内博子エンゲルタンツ公演《リジリア》を観る。西脇順三郎詩集《人類》見本出来、西脇、晒名昇、新倉俊一と代々木八幡・橘壽司で慰労会。渋谷・駒形とぞうで《人類》の出版祝い。七月一日、瀧口修造急逝、七十五歳。瀧口家を訪ねオリーブの枝を捧げる。青山の梨洞から李朝石仏を迎え自室に安置する。妻と北海道

の国縫へ墓参旅行（秋田、函館から妻の身内も同行）。盛夏、粟津剛雄、初対面の柴田道子らと宗左近宅に招かれ骨董品と香夫人の手料理のもてなしを受ける。西脇順三郎に捧げた《夏の宴》を新詩集の題名と決め西脇に装画を依頼するため中目黒の飯寓を訪問。九月、高柳重信句集《日本海軍》に帯文。和田芳恵、昭の三周忌を宗願寺で営む。十月、青木画廊で《ボナ・ド・マンディアル展》を観る。詩集《夏の宴》を青土社から刊行。金子光晴の自伝三部作《どくろ杯》《むねば里》《西ひがし》に感銘。西武美術館で《エゴン・シーレ展》を観る。冬、瀧口家を訪れ遺骨へ《夏の宴》を供え綾子夫人からオリーブの実をいただく。十二月、市ヶ谷・秋の宮で第十回高見順賞の選考委員会、受賞の渋沢孝輔《廻廊》鈴木志郎康《家の中の殺意》、正津勉《青空》を推す。中桐雅夫《会社社の人事》と黒田喜夫《不帰郷》にも言及。

一九八〇年（昭和五十五年）

六十一歳

このころ《古事記》、フレイザー《金枝篇》、柳田國男《遠野物語》、石田英一郎《桃太郎の母》などの神話や民間伝承に心惹かれる。一月八日、黒田三郎死去、六十歳。銀座・パルハラデンで池田満寿夫・佐藤陽子の結婚披露宴。五月、神戸六甲荘での永田耕衣の傘寿記念会に参会。共編の《鑑賞現代俳句全集》を立風書房から刊行開始、編集委員の飯田龍太、大岡信、高柳重信と月報で連載座談会《現代俳句を語る》。宗左近夫妻に誘われて妻と広島柴田家に行く。宍道湖、松江城、出雲大社などを巡る。山田耕一の懇望で拾遺詩集《ポール・クレーの食卓》を書肆山田から刊行。太田大八の画と吉岡の文で絵本を作る計画があるが実現せず。大雨の日、虎の門病院で診察を受ける、悪質の病気ではなく安堵する。七月、八木忠栄の編集で初の随想集

《「死児」という絵》を思潮社から刊行。《日本読書新聞》に吉岡の発言を録した《一車線の文章》が掲載される。改築なった西脇邸に随想集と新詩集を持参する。思潮社主催《現代詩オブジェ展》に参加、詩篇《裸婦》と蓋のない赤い木箱に入った白塗りの拳玉を出品。九月、《俳句》で金子晋、高柳重信、三橋敏雄、高橋睦郎、永田耕衣、鈴木六林男、多田智満子、桂信子、鶴岡善久、津高和一、足立巻一、中村苑子、飯島晴子、加藤三七子、島津亮、鈴木漠、坂戸淳夫、小川双々子、赤尾兜子とシンポジウム《永田耕衣の世界》。三越本店で《良寛展》を観る。初秋、池袋の無尽蔵で弥生土器を購入、店主長尾百翁（泰次）と歴史、文学の話をする、店員笹川竜則がウインナーコーヒを淹れてくれる（のち「無尽蔵事件」起こる）。十月、山本光久編集の《現代詩手帖》が吉岡実特集を組む、新作の詩の替わりに《うまやはし日記》を発表、金井美

恵子との対談へ一回性の言葉——フィクションと現実の混淆へ」でリルケ《ドウイノの悲歌》のような長詩に挑戦したいと語る。〈正倉院拝観展〉を観て宗左近夫妻、柴田道子と金沢へ廻る。十一月、詩集《ポール・クレールの食卓「特装版」》刊行。飯島耕一《三つの物語》に帯文。十二月、市ヶ谷・萩の宮で第十一回高見順賞の選考委員会、天沢退二郎《乙姫様》にも言及するが、多田智満子《蓮喰いびと》、鈴木志郎康《わたくしの幽霊》、受賞の安藤元雄《水の中の歳月》を推す。

一九八一年（昭和五十六年）

六十二歳

一月、西脇邸で会田綱雄らと西脇順三郎の誕生祝い（米寿）、《定本西脇順三郎全詩集》ができる。第一生命ホールで大野一雄舞踏公演《わたしのお母さん》（土方巽演出）を妻と観る。二月、東京国立博物館で《鑑真和上像》を拝観。三月十七日、赤尾兜子鉄道事故

で急逝、五十六歳。伊勢丹美術館で《ピカソ秘蔵のピカソ展》。国立西洋美術館で《アンゲル展》、《泉》に魅せられる、東京国立博物館《中山王国文物展》の幻の国の出土品に感動。七月、草月会館で瀧口修造を偲ぶ会。夏、翌年ドイツ語の修士論文《吉岡実》を書くことになるスイスバーバラ山中と渋谷道玄坂のトップで初めて会い《静物》《僧侶》から選んだ詩について質問を受ける。珈琲店トップは長年に亘ってくつろぎの場であり多くの詩人や芸術家、編集者ともここで会った。ピエール・モリオン《城の中のイギリス人》（生田耕作訳）を読む。九月、詩《豎の声》を《現代詩手帖》に発表。十一月、草月美術館で《西脇順三郎の絵画》展を観る、西脇邸を訪問し「先生」と呼んだ詩人との別れになる。大駱駝艦豊玉伽藍で雪雄子の鈴蘭究舞踏公演《舞ひみぞれ》、パンフレットに一文を寄せる。東京国立近代美術館で《ムンク展》を観る。

詩《巡礼》を《ユリイカ》臨時増刊号に発表。十二月、山の上ホテルでの第十二回高見順賞の選考委員会で座長に選出され《行為の歌》の鷲巢繁男に授賞を伝える、大岡信《水府》、藤井貞和《ラブホテルの大家族》、知念栄喜《加那よ》、北川透《情死以後》も推す。

一九八二年（昭和五十七年）

六十三歳

一月、《高橋新吉全集》内容見本に推薦文。日本橋のツァイト・フォト・サロンで渡辺兼人写真展《逆倒都市》。二月、青木画廊で四谷シモン人形展《ラムール・ラムール》を観る。三月、詩《春の伝説》（改題して《青枝篇》）を《日本経済新聞》に「三月の詩」として四回連載。このころからことばの塊を楽譜のように鏤めた「言譜」のごとき詩形の作品を書きはじめる。四月、詩集《夏の宴》（特装版）刊行。小田急グラウンドギャラリーで《ルドルフ・ハウズナー展》を観る。風邪を

こじらせ肺炎的症状になりしばしば息切れを起こす。六月五日未明、小千谷総合病院で西脇順三郎逝去、八十八歳、愕然たり。芝増上寺で葬儀。渋谷のトップで朝吹亮二、松浦寿輝と会い《麒麟》第〇号を貰う。七月、《現代詩手帖》で大岡信、那珂太郎、入沢康夫、鍵谷幸信と西脇順三郎追悼座談会《比類ない詩的存在》。二十七日、鷲巢繁男脳出血で急逝、六十七歳。八月、《西脇順三郎アラバスク》（追悼）を《新潮》に発表。九月、土方巽が連載《病める舞姫》をまとめる気になったのを白水社の和気元と喜ぶ。初秋、麻布ハイツの仮寓でトマス・フッツシモンズ夫妻を大岡信から紹介される。東京国立博物館でのクリーブランド、W・R・ネルソンの二大美術館所蔵の《中国の絵画展》に圧倒される。十一月、松浦寿輝詩集《ウサギのダンス》に採文。晩秋、会田綱雄、鍵谷幸信、新倉俊一、江森國友と《西脇順三郎年譜》の確認。十二

月、永島靖子句集《真晝》に菜文。モーツアルト・サロンで霧笛舎の中嶋夏舞踏公演〈庭〉を観る。数年来姿を隠していた土方巽から八芳園に妻と招かれ芦川羊子、和気元を交えて《病める舞姫》造本装丁の相談。

一九八三年（昭和五十八年） 六十四歳

一月、詩《甘露》を《すばる》に発表。山の上ホテルでの第十三回高見順賞の選考委員会で座長に選出される、白石かずこ《砂族》、藤井貞和《日本の詩はどこにあるか》、荒川洋治《遣唐》、平出隆《胡桃の戦意のために》に心惹かれ白石、藤井の詩集と入沢康夫の長篇連作詩《死者たちの群がる風景》の三冊を推す、入沢に授賞を伝え高見順賞選考委員の五年の任期を了える。ライヴスペース・プランBで《土方巽・暗黒舞踏——映像構成と談話による》を観る。宗左近夫妻とフルムーン旅行。小倉、宮崎、阿蘇、大分湯布院を巡り

羊子と眺望随一といわれる絶景に一日憩う。新宿京王プラザホテルで《俳句研究》五十周年記念と編集長高柳重信の還暦を祝う宴で祝辞。新宿のバーおけいで飯島耕一《夜を夢想する小太陽の独言》の第一回現代詩人賞受賞の祝宴。初夏、東京国立博物館で〈弘法大師と密教美術〉展、〈八大童子立像〉（金剛峯寺）の六軀に魅せられる。七月、草月会館で瀧口修造を偲ぶ会、土方巽の誘いで二次会、三次会となり六本木で夜が明ける、鈴木志郎康と新詩集の構成などの話をする。八日、高柳重信静脈瘤破裂で急逝、六十歳、大きな打撃を受ける。荻窪・願泉寺の仮通夜、十日の密葬（同夜、高柳重信の弟子夏石番矢の《獵常記》出版記念会）、二十三日の告別式に参列。神田で会田綱雄、鍵谷幸信、新倉俊一、江森國友と《増補西脇順三郎全集》完結の祝い。夏、《吉岡実》の《鑑賞》のため自宅を高橋睦郎から数回にわたり作品成立について質問を受

倉敷に寄る。二月、夏石番矢の処女句集《獵常記》を読む。日生劇場で坂東玉三郎の《メディア》を観る。飯田善國《ピカソ》出版と飯島耕一の帰国を祝う会。三月、入沢康夫の高見順賞受賞パーティ。四月、《北國克衛全詩集》朶に〈断章三つと一篇の詩〉。山の上

ホテルでの土方巽《病める舞姫》出版記念会に出席。土方巽《フック・オフ88——景色へ一匙の髪型》、芦川羊子独舞《スペインに桜》を観る。雅陶堂ギャラリー竹芝で中西夏之展《紫・むらさき・Painting》を観る。五月、詩《青海波》を《海》に発表。四日、寺山修司死去、四十七歳。畠山記念館で伝徽宗皇帝筆《猫図》を観る。東京国立博物館で《ボストン美術館所蔵日本絵画名品展》の岡倉天心遺愛《大威徳明王像》に驚嘆する。土方巽と元藤燦子の来宮の山荘へ妻と招かれ濫澤龍彦、三好豊一郎、種村季弘、池田満寿夫、鶴岡善久（いずれも夫人同伴）、松山俊太郎、芦川

ける。八月十一日、中桐雅夫死去、六十三歳、香を焚く。秋、東京国立博物館で《韓国古代文化展》を観る。十月、詩集《葉玉》を書肆山田から刊行。矢川澄子《鬼とよばれた女》挟みこみに推薦文。十一月、道玄坂トップで麒麟同人と会う。十二月、草月会館での飯田善國詩集《見知らぬ町で》の出版記念会で詩人飯田の誕生を祝福する挨拶。

一九八四年（昭和五十九年） 六十五歳

このころマラルメの《骰子一擲》を秋山澄夫訳、江原順訳で再読する。一月、安井浩司句集《乾坤》を読む。〈現代の詩人〉の一冊として《吉岡実》（5）を中央公論社から刊行。二月、神田・ミロンガで城戸朱理、田野倉康一ら洗濯船同人と初めて会う。三月、山海塾舞踏公演《縄文頌Ⅱ》を観る。三好豊一郎の高見順賞授賞式に出席。城戸朱理、沼田泰彦から《洗濯船》吉岡実特集号の企画を聞

く。春、吉増剛造に同席してもらい道玄坂トップでアメリカの詩人エリック・セランドと会う。セランドから《薬玉》を英訳したいと提案される。六月、《明治大学詩人会主催第1回詩祭》に短文《詩祭に寄せて》。フラン・オプライエンの小説《第三の警官》を城戸朱理に贈る。新宿のシアターアプルで堀内博子《変容の象徴舞踏V》を観る、「銀河おち瀕死の雫子わがむねに」。七月、《洗濯船》第六号が吉岡実特集を組む、下北沢のポム・ド・テエルで慰労会。草月会館で瀧口修造を偲ぶ会。益田勝実《古事記》を読む。十日、黒田喜夫死去、五十八歳。土方巽、芦川羊子と神戸に永田耕衣を訪ね耕衣と土方を引きあわせる。京都市美術館で土方、宇野邦一らと《バルチユス展》を堪能、南禅寺、清水寺を巡る。八月、中村苑子から贈られた折笠美秋句集《虎嘯記》に感銘。九月、田中泯独舞《恋愛舞踏派定礎》(土方巽構成)を観る。オクタビオ・

パスの長詩《白》や詩論《弓と豎琴》を読む。十一月、《田中冬三全集》内容見本に推薦文。飯島耕一、大岡信らとアスベスト館における来日中のパスのお別れ会に出席。《薬玉》で第二十二回藤村記念歴程賞を受賞(同時受賞者は「装幀の業績」による菊池信義)。選考委員から「二十世紀末日本からしか生れない世界に類を見ない独自に見事な詩業」と評価され新宿朝日生命ホールで授賞式。十二月、明治大学詩人会の忘年会に入沢康夫と招かれ洗濯船同人や小林一郎らと会う。松浦寿輝をアスベスト館に伴い土方巽に引きあわせる。

一九八五年(昭和六十年) 六十六歳

一月、《現代詩手帖》でオクタビオ・パス、大岡信、渋沢孝輔、吉増剛造と座談会《言語と始源》。二月、有楽町朝日ホールで《舞踏前夜祭》の土方巽、郡司正勝の講演を聴く。共編の《現代俳句案内》を立風書房から刊行。

朝日ホールで大野一雄・慶人の《死海——ウインナーワルツと幽霊》。新宿文化センターで田中泯《昼の月》(土方巽構成)。朝日ホールで白虎社《ひばりと寝ジャカ》。大野一雄《ラ・アルヘンチーナ頌》再演を観る。三月、《PRISM international》にエリック・セランドによる英訳《雞》と《哀歌》抄を掲載。天沢退二郎の高見順賞受賞の内祝いの会。スタジオ200で大岡信の講演、土方巽演出振付、芦川羊子《東北歌舞伎計画1》。春、飯島耕一《Strangers Sky (他人の空)》との二人集で英訳詩抄《Celebration In Darkness (闇の祝祭)》(尾沼忠良訳)をOakland University KATYDID BOOKSで刊行。四月、城戸朱理と根津美術館で《那智瀧図》を観る。五月、高柳路子歌集《ユモレスク》を読む。四谷シモン《人形愛》出版記念会に出席。土方巽演出、芦川羊子らによるアスベスト館開封記念公演《親しみへの奥の手》を観る。六月、《麒

麟》第七号完成の祝宴に古井由吉と招かれる。吉井画廊での《草野心平展》で中村稔に草野書「夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐……」を薦める。心平の書は西脇順三郎や永田耕衣のそれと並んで敬愛措くあたわざるものだった。七月、《ダブル・ノーテーション》土方巽特集号に談話《戦後日本の一大天才》を発表。夏石番矢句集《メトロポリティック》に帯文。高柳重信を偲ぶ会(三回忌)、共編の《高柳重信全集》を立風書房から刊行開始。土方巽、元藤燐子・べら、芦川羊子、三好豊一郎と京都祇園祭見物へ行き、天龍寺、三千院、寂光院、蓮華寺、曼殊院、詩仙堂、智積院、三十三間堂などを巡る。本所中学校での明德開校百十周年記念の催しに出席。九月、スタジオ200で土方巽演出振付、白桃房舞踏手《東北歌舞伎計画3》を観る。十月、城戸朱理詩集《召喚》に帯文。十一月、下北沢・Tでの《召喚》出版記念会で挨拶。《洗濯船》

第七号のアンケートへわたしにとつてのポルノグラフィに答える。鈴木一民と京都市美術館で〈富岡鉄斎展〉、二月堂、三月堂、大仏殿、興福寺などを巡る。十二月、宗田安正句集《個室》に跋文。転居が決まった経堂の高橋睦郎宅を訪問。嫂から兄長夫の病状悪く入院中と知らされ高座渋谷の南大和病院に兄を見舞う。元藤燐子夫人から土方巽倒れるの報、肝臓癌の疑いと聞かされる。アスベスト館へ見舞に行き弟子に振り付けている土方に驚く。スタジオ200で土方巽演出振付の〈東北歌舞伎計画4〉を観る（土方の最後の作となった）。兄危篤の知らせで入院先に急行するが奇蹟的に持ちなおす。

一九八六年（昭和六十一年） 六十七歳  
一月、青木画廊で〈ヘルマン・セリエント展〉。妻と東京女子医大付属病院に土方巽を見舞い南大和病院に兄を見舞う。国立劇場で

比叡山開創千二百年記念の天台声明〈六道講式〉を拜聴。二十一日、土方巽容態悪化の報で入院先に駆けつけ澁澤龍彦、種村季弘、飯島耕一、唐十郎らと土方に対面する、肝硬変肝臓癌併発で土方巽死去、五十七歳。アスベスト館で通夜、初めての弔辞を書く。告別式。二月、アスベスト館で土方巽を偲ぶ会。香奠返しのリコードに〈慈悲、心鳥がバサバサと骨の羽を抜けてくる〉と命名。三月、岡田隆彦の高見順賞受賞を祝う会。来宮の山荘で土方巽の四十九日。アスベスト館で元藤燐子、鶴岡善久と土方巽の遺稿整理。元藤の提唱で遺稿編纂準備委員会が召集され装丁を担当、書名を《美貌の青空》と発案し即決される。四月、詩集《葉玉》（特装限定版）刊行。土方巽追悼詩〈聖あんま断腸詩篇〉完成。五月、永田耕衣の書画集《錯》に〈日記抄〉を再録。夏、経堂から逗子に移った高橋睦郎を訪問。九月、仏訳版《Anthologie de Poésie

Japanese Contemporaine》に〈僧侶〉を収録。十月、一周忌までに出版したいと《土方巽頌（仮題）》の準備に追われる。慈恵医大病院に下咽喉癌の手術後の澁澤龍彦を見舞う。十七日、鮎川信夫急逝、六十六歳。〈鮎川信夫と別れる会〉。十一月、清水將文個展〈火と呪術〉オープニングパーティー。十二月、《麒麟》の散開式。有楽町・炉端での忘年会（エリック・セランド夫妻ほか）に夫婦で出席。

一九八七年（昭和六十二年） 六十八歳  
一月、アスベスト館で土方巽の一周忌、共編の土方巽遺文集《美貌の青空》を筑摩書房から刊行。二月、渋谷パルクで〈土方巽舞踏写真展〉、五井輝、大野一雄の舞踏を観る。銀座・ギヤラリー池田美術での梅木英治銅版画展のオープニング、梅木や高柳誠と会う。三月、《洗濯船》に選句〈耕衣三十句〉、近作の造語の頻出にはしばしば閉口する。《土方巽

頌》の構成を模索。三月、十二月、毎日新聞社主催の〈ポール・デピスの世界展〉に所蔵の〈猫とリンゴ〉を出品。六月五日、高橋新吉死去、八十六歳。翌日の《毎日新聞》に談話掲載。告別式で弔辞。六日、森茉莉死去、八十四歳。兵庫県民会館での〈米寿永田耕衣の日〉の耕衣独演と大野一雄独舞〈睡蓮〉朝の挨拶〉に感銘。七月、《岡井隆全歌集》内容見本に推薦文。八月、高貝弘也詩集《敷き藁》に帯文。五日、澁澤龍彦死去、五十九歳。通夜、東慶寺での葬儀に参列。土方巽追悼公演《病める舞姫》第二夜の笠井叡オイリユトミー〈精霊の王国〉（第一部で井上品宏の〈僧侶〉朗唱）を観る。九月、澁澤龍彦の四十九日。渋谷淳一の慫慂で《土方巽頌——〈日記〉と〈引用〉に依る》を筑摩書房から刊行。このころフランシス・ベーコンの絵に惹かれる。《TEMBLOR》第四号にエリック・セランドの英訳で〈巡礼〉〈葉玉〉〈垂



工透析治療を受ける。《うまやはし日記〔弧木洞版〕》出来。五月、一月に続き《るしおる》に〈日記 一九四六年〉発表。生前最後の文章となる。二十五日、個室に移され面会謝絶。三十日、重態。三十一日午後九時四分、急性腎不全のため入院先で永眠、七十一歳と一月半の生涯だった。同夜、目黒区青葉台の自宅に遷る、居間にはポール・デイヴィスの猫のアクリル画と小沢純の兎の油彩画が掛けられていた。六月一日、自宅で仮通夜。二日、真性寺で本通夜。三日、午後二時から同寺で告別式（喪主は妻陽子、葬儀委員長飯島耕一、友人代表大岡信、高橋睦郎、司会平出隆）。大岡信、入沢康夫、高橋睦郎、中西夏之、金井美恵子、小田久郎の弔辞、炎暑のなか詩人ら多数が会葬、大岡信による挨拶状に〈死兎〉の一節が引かれた。柩には白秋の《花檉》が納められ町屋斎場で荼毘に付された。同月、《朝日新聞》ほか各紙が追悼文を掲載。

七月、《現代詩手帖》が追悼特集〈お別れ吉岡実〉、《ユリイカ》が〈追悼Ⅱ吉岡実〉、《四次元通信》が〈追悼吉岡実〉を組む。真性寺で四十九日、戒名は永康院徳相実道居士、神田やぶそばで故人を偲ぶ。八月、《新潮》《文學界》《海燕》《ちくま》《るしおる》ほか各誌が追悼文を掲載。九月、笠井叡が中野文化センターで吉岡実追悼公演〈聖あんま断腸詩篇——舞踏とオイリュトミーによる〉を踊る。

一九九一年（平成三年） 歿後一年  
四月、《現代詩読本——特装版吉岡実》が刊行される。五月、医王山真性寺で一周忌、建立された墓に納骨される、巢鴨・田村で故人を偲ぶ。六月、高橋睦郎が吉岡への献辞のある《球体の神話学》を刊行。十月、浅草・木馬亭で〈吉岡実を偲ぶ会〉が開かれる（発起人飯島耕一、大岡信、入沢康夫、種村季弘、高橋睦郎）。第一部は司会高橋睦郎で知

友たちの思い出話（安藤元雄、飯島耕一、入沢康夫、江森國友、大野一雄、小田久郎、落合茂、金子國義、佐々木幹郎、高梨豊、多田智満子、種村季弘、那珂太郎、中西夏之、夏石番矢、矢川澄子の十六人と吉岡陽子）、第二部は五街道雲助の落語、第三部は星キララらのストリップショー、ロビーに手蹟や装丁の原画が展示された。十一月まで、県立神奈川近代文学館での〈日本の詩歌展——詩・短歌・俳句の一〇〇年〉に詩集《黒革装本《静物》と初版《僧侶》や書〈卵〉などが出品される。この年、エリック・セランドによる英訳詩集《Kusudama》（詩集《薬玉》の全訳）がFACT Internationalから刊行される。

一九九二年（平成四年） 歿後二年  
五月、真性寺で三回忌、巢鴨・田村で故人を偲ぶ。

一九九三年（平成五年） 歿後三年  
四月、城戸朱理詩集《非鉄》が吉岡実の慰霊のために編まれる。五月、装丁者渡辺一考と著者の生前からの約束により詩集《ポール・クレーの食卓（私家版）》、詩集《薬玉（私家版）》刊行、実際の完成は十一月か。六月、《三蔵》第四号が吉岡実特集を組む。十一月、《安井浩司全句集》に帯文。俳句雑誌《雷帝》に同人宗田安正の編・解題による〈吉岡実句集〉（自ら活字にすることを認めた俳句作品集の初の集成、三十九句）が発表される。

一九九四年（平成六年） 歿後四年  
三月十六日、NHKテレビ《ナイトジャーナル》の〈詩集館〉でイッセー尾形の朗読、橋本一子の音楽（ピアノ）による〈サフラン摘み〉が放送され（約二分四十七秒）、キャスターの宗教学者島田裕己がコメントした。四月まで、王子ペーパーギャラリー銀座で〈テ

クストにそって―画家と装幀家と―書肆山田の〈本展〉が開催され自身の著作(ポール・クレーの食卓、葉玉、ムーンドロップ、うまやはし日記)はもちろん装丁関係では背・平に指定をした束見本(葉玉)や用紙・刷色のチップを貼った表紙・扉の指定紙(葉玉、夜の音)のほか原画として片山健の鉛筆画(ポール・クレーの食卓)と西脇順三郎のカット(ムーンドロップ)、また他の著者への装丁作品(「評伝オルフェ」の試み、春 少女に、花火、〈箱船再生〉)のためのノート、夜の音)が展示される。五月から七月まで、神奈川県立近代美術館で〈馥郁タル火夫ヨ―生誕百年西脇順三郎その詩と絵画〉展が開催され西脇の原画を表紙に使用した《夏の宴》《ムーンドロップ》や西脇のデッサン帳(説明にいわく「筑摩書房版『西脇順三郎全集』(一九七二)―一九七三)のカットのために描かれたもの。吉岡実に贈られ、吉岡ほのちに

自著『ムーンドロップ』の装幀に、この中のカットを使っている」が出品される。

一九九五年(平成七年) 歿後五年  
二月、《現代詩手帖》が〈特集・吉岡実再読〉を組む。五月、小林一郎編《吉岡実全詩篇標題索引》刊。六月、〈現代詩文庫〉の一冊として《続・吉岡実詩集》が思潮社から刊行。

一九九六年(平成八年) 歿後六年  
三月、《吉岡実全詩集》が筑摩書房から刊行。十一月、《私のうしろを犬が歩いていた―追悼・吉岡実》に遺稿〈日歴(一九四八年・夏曆)〉掲載。

一九九七年(平成九年) 歿後七年  
八月二十五日、永田耕衣肺炎で長逝、九十七歳。戒名は自ら付けた田荷軒夢葱耕衣居士。

一九九八年(平成十年)

歿後八年

十二月、鶴山裕司《詩人について》刊。

四月、城戸朱理《吉岡実の肖像》刊。

二〇〇〇年(平成十二年)

歿後十年

十二月、小林一郎編《吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第2版〕》刊。

二〇〇六年(平成十八年)

歿後十六年

三月、〈詩の森文庫〉の一冊として《吉岡実散文抄―詩神が住まう場所》が思潮社から刊行。六月三日、清岡卓行死去、八十三歳。

二〇〇二年(平成十四年)

歿後十二年

五月、詩集《赤鴉》(最初期の和歌と俳句を収めるが詩篇は収載されていない)が弘木洞から刊行。秋元幸人《吉岡実アラベスク》刊。六月、吉増剛造がNHKラジオ第二放送で吉岡実について語る。十一月、小林一郎《吉岡実の詩の世界》(ウェブサイト)開設。

二〇〇七年(平成十九年)

歿後十七年

十月、秋元幸人《吉岡実と森茉莉と》刊。

二〇一〇年(平成二十二年)

歿後十九年

四月二十九日、吉岡実研究者秋元幸人が肺癌で死去、四十八歳。

二〇一一年(平成二十三年)

歿後二十年

八月、《ウルトラ》が特集《吉岡実2011、吉岡実この一篇》を組む。

二〇〇三年(平成十五年)

歿後十三年

四月、句集《奴草》が書肆山田から刊行。

二〇〇四年(平成十六年)

歿後十四年

(畢)

〔典故とした主な資料〕

「死児」という絵（思潮社、一九八〇）

土方巽頌（筑摩書房、一九八七）

「死児」という絵（増補版）（筑摩書房、一九八八）

うまやはし日記（書肆山田、一九九〇）

以上の吉岡実の散文著書および未刊行散文。

〔 〕 〈吉岡実詳細年譜〉《ユリイカ》一九七三年

九月号

吉岡実編《年譜》《吉岡実》、中央公論社、一九八四

年一月刊

鍵谷幸信編《西脇順三郎年譜》《定本西脇順三郎全

集（第十二巻）》、筑摩書房、一九九四年十一月刊

吉岡陽子編《年譜》《吉岡実全詩集》、筑摩書房、一

九九六年三月刊

小林一郎編《吉岡実全詩篇標題索引》〔改訂第2版〕

《文藝空聞、二〇〇〇年十二月刊》

小林一郎作成《吉岡実の詩の世界》（ウェブサイト、

二〇〇二年十一月開設）

〔付記〕

本年譜では、吉岡実の伝記面の記述に精細なることを期した。新聞、雑誌、単行本名、総題は《 》に、詩篇や舞踏などの個々の作品名はへゝに入れた。

「」内は吉岡自身の文章からの引用。読点でつながる文は同じ日の出来事を表わす。吉岡実の著書・被翻訳書と編纂書は初刊時に太文字で表示した。詳細は《吉岡実書誌》の該書の項目を参照されたい。

本稿の執筆にあたって多くの資料を借覧させていただいた吉岡実夫人陽子さんはじめ、本年譜を含む現代詩読本版《吉岡実資料》の担当編集者元思潮社の大日方公男さん、初刊時に原稿段階でお目通しいただいた飯島耕一さん、平出隆さん、大泉史世さん、淡谷淳一さんに改めて深甚なる謝意を表す。

二〇二二年八月五日 東京・練馬にて

編者 小林一郎

〔刊行・公開記録〕

吉岡実年譜……………

現代詩読本——特装版 吉岡実、思潮社

一九九一年四月十五日 刊行

吉岡実年譜〔改訂第2版〕……………

吉岡実の詩の世界（PDFファイル）

二〇二二年八月三十一日 公開

